

# コース報告

クラス責任者

C 1	
I 担当講師名	
二宮理佳(コースヘッド)・斎藤純子	
II 学生のうちわけ	
学生数 9名	男性 6名・女性 3名
国籍 アメリカ 8名・スウェーデン 1名	
III 教材(書名、扱った課の番号など)	
主教材	『Japanese for College Students, Basic Vol.1』
副教材	『げんき』(抜粋) 『ようこそ』(抜粋) 『Situational Functional Japanese』(抜粋) 『Japanese for Busy People』(抜粋) 『絵とタスクで学ぶ日本語』(抜粋) 『かな入門』(抜粋) 『Basic Kanji 500』(抜粋)
視聴覚教材	使用せず
IV コースの目標	
日本の文化についても理解を深めながら、読む、書く、聞く、話す、の4技能を使って下記のことのできるようになることを目標と設定した。 リスニング：簡単な日常会話を理解できる スピーキング：日本の生活において基本的な会話ができ、生活できる (例：自己紹介、買い物やレストランでの注文、道聞き、自分の日常生活についての簡単な説明、日本や行った場所の印象について話せる等) リーディング：ひらがな、カタカナ、漢字で書かれた簡単な読み物が読める ライティング：ひらがな、カタカナ、漢字で短いエッセイが書ける	
V 評価の基準	
クラス参加(出席／クラスでのワークシート／宿題)	10%
作文	5%
クイズ(ひらがな・カタカナクイズ／漢字クイズ)	10%
ユニットテスト(4回)	20%
オーラルテスト(オーラルパフォーマンス3回、インタビュー1回)	15%
期末テスト(筆記10%、インタビュー10%)	20%

プロジェクト（①武蔵境買い物・リサーチ：2% ②Show&Tell：4% ③文集：4% ④スキット：10%）		20%
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）		
<p>コースの構成は2種に分けた。1つは、（A）教科書を主とした基礎文法の習得と運用練習、もう1つは、（B）（A）で習得していく基礎力を総合的に活用して行う種々のプロジェクトである。こちらは第4週以降（A）と平行して進めた。</p> <p>基本的に1週間に2課進んだ。フォーメーションとドリルで2.5～3コマ、漢字とロールプレイに各1コマ、読みと作文（課題紹介のみ）に1コマをあてた。漢字導入の日と読みの日は同じ日に重ならないようにした。</p> <p>2課に1回、筆記と口頭テストを行った。口頭テストは、初見の状況でロールプレイを即興で作る形式のオーラルパフォーマンスを3回と、インタビュー形式を1回行った。最後の2課は筆記と口頭テストともに期末に組み込んだ。</p>		
Ⅶ 授業の内容		
聞き	特にリスニングの時間は設けなかったが、フォーメーションやドリル、読みのクラスの中で、リスニング形式の練習も取り入れた。	
話し	<p>【フォーメーションとドリル】</p> <p>ユニットテストと同日に新しい課が始まる場合を除いて、文法ノートを読み、テープを使って予習して来ることを義務とした。フォーメーションでは、新しい文法事項の要点説明（予習が前提のため、多くの場合は学生から答えを引き出す問答の形で行う）の後、基本文型を口頭で習得させ、ドリルでは、日常生活でのシチュエーションの中で臨場感を持って文型や語彙を練習させるように常に意識した。その為、状況の説明を絵や言葉で行い、必ず状況設定をはっきりさせてから行った。</p> <p>【ロールプレイ】</p> <p>教科書にあるシチュエーションに適宜状況設定を付け加えたりしながら行った。与えられた状況の中で即興で会話を作り役を演じる練習の積み重ねは、オーラルパフォーマンスとスキットにつながっていくため、誰と組んでも臨機応変に対応できるよう頻繁にペアを変え練習させた。練習中には教師の介入は極力控え、一度自力で会話を作り上げさせ、それを発表させた後に表現や語彙の導入、間違いの訂正を行い、場合によっては再度同じものを練習させた。またこの後、一つの型としてモデル会話を利用した。発音、イントネーション、ポーズ、応答語、男女差等に注意させながら教師についてモデル会話をリピートさせ、次のロールプレイのクラスまでに指定された会話を暗記してくるよう指示した。そして次のクラスの始め5分くらいでこの暗記を数人にあてて確認した。</p>	
読み	教科書の読み物を使用した。内容理解と興味を高めるためにプレアクティビテ	

書き	<p>イーを行ってから、語彙、漢字を確認し、全体での音読練習をした。その後、ペアで再度音読させ合った後、内容理解のための設問を個別にさせた。終えたものには、別の読み物を与えて読ませた。全員が教科書の読み物の課題を終えた頃、教科書の読み物にもどって口頭で内容確認をしたり、内容を再生させた。(課によっては全体の音読練習の前に読み物を音で聞かせ、リスニング練習としても使用した。)</p> <p>【作文】</p> <p>1課から7課までは、その課の新出文法を使うための課題を出し、1課に1～2ページの作文を書かせた。8課以降は、プロジェクトの文集にのせる作文(2回書き直し)の準備にあてた。</p> <p>【漢字】</p> <p>最初の段階で漢字への興味を喚起させたかったため、1課の漢字に入る前に、漢字というものを基本的に理解するための時間をとり、漢字の成り立ちや構成、歴史等の基礎知識の導入を問答形式で行った。またはねやとめ等の感覚をつかませる為、15分ほど筆を使わせた。各課の漢字のクラスではフラッシュカードで読みを学ばせた後、書き順、成り立ち、起源を紹介した。また記憶を助ける覚え方や絵などに関連させての覚え方等も適宜用いて、早い段階から学生一人一人が自分に合った漢字の習得方法を見つけられるよう様々なアプローチを紹介していくよう意識した。学生自身にも連想法を考えさせ、クラスに紹介することも奨励した。また後半の課では、既習の漢字の復習もフラッシュカードを使って適宜行った。</p>
Ⅷ 校外学習 (プロジェクト①)	
日 時	7月28日(水)
行 き 先	武蔵境
活 動 内 容	<p>3人1グループで決められたタスクを武蔵境で行い、その結果をクラスにもどって報告する。タスクには、指定されたものを探して買ってくるタイプのものや、タスクをするために人に何かを聞いたりするタイプのものや、指定された場所に行き調べてくるタイプのものがあった。</p>
Ⅸ 総括 (良かった点、反省点、今後の課題等)	
<p>学習意欲が高く、協力的で思いやりのある学生がいる反面、個性的だが、クラスで他の学生といっしょにものを学ぶという基本的な姿勢のできていない学生もおり、かなり大変なクラスだった。幸い、クラスとしては活気もあり仲もよかったため救われたが、クラス運営と言う点では教師側の負担は大きかった。その主な理由がロータリーで送られてくる大学院生たちの日本語のニーズとICUサマーコースの目的とする日本語が違っていることに起因すると思われる。彼らの多くはサバイバル日本語を学ぶつもりできており、アカデミックなレベルでの4技能の習得を目的とするこのコースの目標とはかなり食い違っている。また、このコースがかな</p>	

りの速さで進む短期集中コースだという点もいま一つわかっていないまま、履修を決めているのかもしれない。コース初日に、全くの初めての学習者にはクラスの他に1日、5～6時間の勉強を要するクラスだと言う事や予習復習が必須だということを繰り返し説明したのだが、このような心構えでコースを始めていないため、ひらがな習得、またはカタカナ習得の時点から遅れをとってしまう。最初に出遅れるとこの速さで進むサマーコースの中で遅れを取り戻すのは非常に難しい。こうして最初からコースについていくのが困難になり、途中、落ち込んだり、非協力的、攻撃的になったりしてしまっていた。これはクラス運営の上で非常に負担になる上、いっしょにコースをとっている他の学生にもいい影響を与えるとは思えない。

C1には去年の夏もロータリーの学生に関して同じ問題が見られた。今後もサマーコースでロータリーの学生を受け入れていくのであれば、何らかの改善案を考えていかななくては毎年同じ問題が起こる。

今、私が考えられるいくつかの提案は、ロータリー学生のクラスを別枠で作る、それが無理なら、このサマーコースの性格を事前にもっとしっかり詳しく伝えておき（全くのゼロスタートの学生には最低1日5～6時間の勉強時間が必須であることも具体的な数字を出して強調しておく。そうすればこのコースがどのような進度のクラスかを的確に示せるはずである。）このようなコースをとる必要も自信もない場合は、夏のこの集中コースではなく、通常の速さの秋からのクラスをとるようにさせる、の2点である。今後ご一考をお願いしたい。

また、一人の学生は9月からも残るため、追試が受けられるだろうと考え、最後3日は国での結婚式出席のため、帰国するスケジュールで来ていた。このような学生を減らすため、追試についてのICUの規則をサマーコースのホームページにでも掲載しておくのも一案ではないかと考える。

コース終了後のアンケートでは、学生は大変だったがたくさん学んだとコメントしており、大半が満足をしているようだった。今年も2つ上のC3から降りてきた学生が2人いたが、今年はクラスの人数がそんなに多くなかったことから、これらの学生には個別指導でかなり対応できた。また、本人がある程度納得して降りてきたことも大きい。

C 2	
I 担当講師名	
黒川美紀子（コースヘッド）・有留 寛大・小松 満帆	
II 学生のうちわけ	
学生数 19名	男性 13名・女性 6名
国籍	アメリカ 15名・イギリス 2名・中国 1名・韓国 1名
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主 教 材	『Japanese for College Students, Basic Vol.2』
副 教 材	クラス活動のヒントとして 『日本語コミュニケーションゲーム80』

	『ドリルとしてのゲーム教材 50』 『クラス活動集 101』『続クラス活動集 131』等 作文の教材として 『みんなの日本語初級 やさしい作文』（第6課：はがき、第4課：家族） 速読用漫画教材として 『日本語ジャーナル』『マンガで学ぶ日本語会話術』（2003年5月号、2004年2月号）	
視聴覚教材	『ビデオ講座日本語 ⑩やりもらいの表現（2）』 『ビデオ講座日本語 ⑭日本人のジェスチャー』 『ビデオ講座日本語 日常生活に見る日本の文化⑤』第9話 『新日本語の基礎Ⅱ 復習ビデオ』第1話：宝くじ	
Ⅳ コースの目標		
初級中盤のコースとして、日常の単純で実用的な場面において、日本語でコミュニケーションを図れるようになることを目標とし、読む、書く、聞く、話す、の四技能を総合的に伸ばすとともに、日本人や日本文化に対する理解を深める。コース終了時までには、約110漢字を習得し、あわせて日本語のワープロや電子メールも使えるようにする。		
Ⅴ 評価の基準		
	レッスンテスト（2課ごと計4回） （文法・読解70％、聴解15％、会話15％） 最終試験 （文法・読解50％、漢字10％、聴解25％、 会話15％） 単語クイズ（各課の最初の時間に実施） 漢字クイズ（各課の学習後に復習テストとして実施） 作文（「はがき」「家族」の計2回） プロジェクト（吉祥寺オリエンテーリングの発表、 レポート30％、スキット50％、文集20％） 宿題（各課フォーメーション、週日記）	40％   20％   5％ 10％ 10％ 10％ 5％
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）		
2日で1課を学習、2課終了ごとにレッスンテスト（2週目から5週目までの毎週水曜日）を行った。各課に入る前に、新出語彙と文法ノートの予習を義務付け、最初の時間に、聞いた単語を書き取り、その意味を英語で書くという単語クイズを実施した。文法項目はフォーメーションに基づいて導入し、適宜ドリルやロールプレイと組み合わせながら、最初からできるだけ現実の使用場面を意識して練習できるよう工夫した。漢字は、次の課の漢字学習時間の最初に前課の漢字クイズを行い、継続的な復習による定着を図った。平均的な時間数の割り当ては、フォーメーションとドリルに3コマ、ロールプレイ1コマ、読解1コマ、漢字1コマであった。		

<p>学習内容に合わせ、適宜ビデオやマンガ、作文なども取り入れた。2週目、4週目、6目に計3回実施したビジターセッションは、学習した内容の発表の場と位置付けるとともに、校外学習や文集作成と結びつけることにより、日本人から積極的に情報を得て、それを利用するという目的を与えた。5週目、6週目には、文集作成、スキット、最終パーティーで披露する日本語の歌の練習も行った。</p>	
<p>Ⅶ 授業の内容</p>	
聞き	時間の都合で、特に聴解だけに焦点を当てた練習はできなかったが、各課の単語クイズはディクテーションを兼ねており、レッスンテストでも毎回聴解テストを行った。
話し	ロールプレイを中心に会話力の向上を図るとともに、校外学習後の報告会や、スキットの発表会も行った。ビジターセッションは、学生たちが実践的な会話力を身につける格好の練習の場となった。
読み	教科書の読解練習を中心に、適宜、日本語ジャーナルの「マンガで学ぶ日本語会話術」なども取り入れた。
書き	はがきの書き方、原稿用紙の使い方、日本語ワープロ及び電子メールの使い方を学習した。宿題として週日記を課した。最後の文集では、全員がワープロで600字程度の作文が書けるようになった。
<p>Ⅷ 校外学習</p>	
日 時	7月22日(木) 第2～3時限目
行 き 先	吉祥寺
活 動 内 容	<p>①事前にビジターセッションを行い、ICUの日本人大学生から吉祥寺について話を聞く(どんな所か、吉祥寺のお薦めスポット等)</p> <p>②実際に吉祥寺に行き、オリエンテーリングのポイントをまわるとともに、自分の「お気に入りの場所」を見つける。</p> <p>③ICUの日本人大学生に教わった「吉祥寺のお薦めスポット」と自分が見つけた「お気に入りの場所」についてクラスで発表する。</p> <p>④発表した内容に基づいて、レポートを提出する。</p>
<p>Ⅸ 総括(良かった点、反省点、今後の課題等)</p>	
<p>蓋を開けてみると学生数が19名と予想外に多く、急遽、文法練習や会話練習だけでも少人数で実施できるようグループ分けやスケジュールの変更を行ったが、特に混乱もなく無事コースを終了することができた。非常にまとまりのあるクラスで、人数の多さがかえってクラスのパワーとなっていたようにさえ思う。今年は例年にない猛暑で、5週目辺りには学生たちにもかなり疲れが見られたが、欠席や遅刻はほとんどなく、授業態度や課題の提出状況も素晴らしかった。また、教室外でも積極的に町に出て行こうとする学生が多く、宿題として課した週日記からも、生き生きとした留学生活の様子が窺えた。スケジュールが詰まっていたため、聴解に焦点を当てた練習ができなかったこと、予定していた作文練習の一部や発音練習ができなかつ</p>	

たこと、人数が多かったため、個人指導の時間が一人15分になってしまい、もっと長くやってほしかったという声があったことなど、反省点もあるが、全体的には満足のできる充実した6週間だったと思う。最終日のスキット発表では、全員が台詞を暗記し、効果音や衣装まで準備して、こちらが期待していた以上の素晴らしい発表をしてくれた上、最終パーティーでも、クラス一丸となった見事なパフォーマンスを披露してくれた。日本語力の向上だけでなく、それ以上の大きな学習成果をあげてくれたと思う。学生たちのアンケートを読むと、中にはプレースメントテストの結果に不満を持ち、もっと上のクラスで勉強したかったと感じていた学生もいたようではあるが、単なる知識としての日本語ではなく、この6週間でそれを使える日本語力としてもらえたなら幸いである。ただ、プレースメントのあり方としては、応募時に、主要文法項目の既習未習を指導教員に記入してもらい欄を設けるなどの工夫は、今後一考に値するのではないかなと思う。こうした反省の一方で、数名の学生からは、帰りの空港やJETプログラムの勤務先に戻ってみて初めて6週間の学習成果を実感し、感動したというメールが届いている。この夏の経験が学生たちの今後の人生を豊かにし、ますます日本語の学習に励んでくれることを祈っている。

C 3	セクションA・B
I 担当講師名	
A： 下村朋子（コースヘッド）・安納恵子 B： 後藤多恵（コースヘッド）・福島亜子	
II 学生のうちわけ	
学生数 A：12名 B：11名	A： 男性 6名・女性 6名 B： 男性 5名・女性 6名
国籍	A：アメリカ 8名（日系1・韓国系2・中国系1）・イギリス 1名・ カナダ 1名（中国系）・ベネズエラ1名（中国系）・イタリア 1名 B：アメリカ 9名（うち日系2・中国系1・韓国系1）・スペイン 1名 台湾 1名
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主 教 材	『Japanese for College Students, Basic Vol.3』
副 教 材	自作プリント、ワークシート
視聴覚教材	ビデオ「日本語でだいじょうぶ」「となりのトトロ」 歌「さくら」
IV コースの目標	
日常生活のさまざまな場面で、状況にあった適切な日本語で効果的にコミュニケーションができるようになる。	
1) C 3 コースは初級の最終レベルであるため、中級への準備として、初級で必要な文法、表現、単語、漢字を網羅し、使えるようになる。	

2) 日本での日常生活で遭遇する様々な状況で、場面に応じた適切な表現を使って、意思の伝達ができるようになる。具体的には、必要に応じて、助言や許可を求めたり与えたりできるようになること、また、必要な場面で、敬語を用いて話したり書いたりできるようになること。	
V 評価の基準	
クラス参加（授業参加、宿題提出、文集作成）	10%
テスト（レッスンテスト、ロールプレイテスト）	35%
クイズ（単語クイズ、漢字クイズ）	10%
期末テスト	15%
作文	10%
プロジェクト	10%
その他（Listening・ビデオ・オリエンテーリング）	10%
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
学習内容は基本的に教科書にそって、21課から30課までをカバーした。1週間に2課ずつ進め、1課に平均5～6コマを使った。残りの3～4コマは、毎週、レッスンテストとビデオ視聴または特別活動（オリエンテーリング、ビジターセッション、個人プロジェクトの発表、文集作成、など）にあてた。	
VII 授業の内容	
聞き	各課で学習内容に沿ったディクテーションと長文理解の練習問題を行った。またビデオ教材を使った授業も全5回行った。その他、ビジターセッションと個人プロジェクトのインタビュー調査により、聞きの訓練を積ませた。
話し	教科書の各課のロールプレイで、新出文型の定着と運用を目指した。2回のビジターセッションでは、十分な準備のもとに日本人とのまとまった会話を経験させた。また、個人プロジェクトではインタビュー調査を課した。
読み	授業では基本的に教科書の読解文のみを扱った。授業以外では、個人プロジェクトを進める過程で、できる限り文字資料も扱うよう指導した。
書き	教科書の読解文に似たトピックで作文を7回課したほか、オリエンテーリングについての作文、個人プロジェクトの計画書および小論文なども課した。作文は教師が初稿を添削し、それを書き直したものを再提出させた。
VIII 校外学習：吉祥寺オリエンテーリング（A、Bセッション合同）	
日時	7月23日（金）2～3限目
行き先	吉祥寺駅周辺
活動内容	第3週金曜日にオリエンテーリングを行った。基本的には昨年の調査用紙と同じであるが、昨年使われた店の名前や様子が変わっているところもあったので、調査項目を少し変更した。学生が興味を持てるような店や、日本的な店、美術館などの項目を付け加えた。各グループは4人を一組とし、駅南口より調

	<p>査を開始させた。また、活動のまとめとして、翌週の月曜日に「オリエンテーリング中にみつけた面白い店や物」について原稿用紙1枚程度の作文を提出させた。さらに、その週の金曜日には、ペアでその作文に書いた内容をまとめ、口頭で発表させるオリエンテーリング発表会を1時間設けた。各グループが行動を共にしないよう、昨年の実施方法にそって、今年も各グループの最初の調査場所を変えた。また、A、Bセクションのゴール地点も変えた。各グループにリーダーを決めさせ、リーダーがグループをまとめるように指示した。オリエンテーリングはグループ対抗とし、各セクションで早くゴールインし、また調査の答えも正しかったグループに景品を出した。</p>
--	--

## IX 総括（良かった点、反省点、今後の課題等）

### 全体の様子

今年のC3の学生は全体的に文法、読解はC3レベルに達しているが、聴解力がC2レベルであるという学生が多かった。また、文法力はC4レベルだが聴解力はC3からC2レベルという学生や日本に数年住んだ経験から会話力はC3レベル以上あるものの文法や漢字力はC3レベル以下という学生などもいた。全体的に四技能の釣り合いがとれていない学生が目立ち、その対応に追われた。また今年度は、秋学期からICUに残る学生が全体で11名（A：5、B：6）おり、C4レベルへ向けての橋渡しができるような指導が求められた。一斉授業では十分指導することができない内容（本人が苦手な文法項目や技能など）に関しては、オフィスアワーを通じて指導を行った。

### 学習内容

文法や読解に関しては教科書の内容のみを扱った。C2レベルの文法項目にも積み残しがある学生と初級の項目を全てすべて終えた学生がクラスに混在していたため、学習内容の焦点を合わせるのに苦労した。結果的には文法と語彙は教科書以上のものを提出することができず、既に初級を終えている学生にとっては学習内容が物足りなかったかもしれない。漢字に関しては、学生にとって母国で未習の漢字が『ICUの日本語Vol.3』では既習のものとして扱われていることがあり、そのことでコース開始直後は学習全体に混乱をきたすことがあった。教科書に入る前にまず『ICUの日本語Vol.2』までの漢字と文型の復習をする必要があったと感じた。

### ビジターセッション

C3はすでに母国で一通り初級を終えて来ている学生が多かったが、プレースメントテストで全体的に聞く力が弱いという結果が得られたため、ビジターセッションを積極的にカリキュラムに取り入れた。1回目は日本人学生、2回目は社会人のビジターセッションを実施し、準備段階での練習や当日の日本人との個人的な会話を通して聴解力を伸ばすことができるよう工夫した。日本人学生とのセッションでは、自己紹介のほか、ことわざの意味を聞くタスクを与えた。また社会人とのセッションでは、敬語を使って自己紹介をしたり、質問したりする活動をさせた。ビジターの方々が辛抱強く学生の話に付き合ってくれたことが、学生にとって大きな励みになったようである。主催者側の反省点として、学生ボランティアの方々に対する事

前の説明が足りなかった点が挙げられる。遅くとも前日までには授業内容を知らせ、ビジターが自信をもって授業に参加できるような配慮をすべきであった。

#### 吉祥寺オリエンテーリング

今年是一日の授業コマ数に変更になったということで、昨年の予定を少し変更し、一限目の授業を15分ほど早く終わり、その時間をオリエンテーリングの説明に当てた。10時過ぎのバスには乗れるように学校を出発させたので、現地での活動時間は十分にあったようである。12時半のゴール締め切り時間に早いグループで10分前、遅いグループでもぎりぎりに戻ってくることができた。オリエンテーリングの活動を通して、学生たちはお互いよく知り合えたようで、活動後の4週目頃から、授業の雰囲気や学生の様子が和らいで、それぞれが親しく話せるようになった。そういう意味でもこの活動は大変有意義であったと思う。しかし、もしもう少し早い時期でオリエンテーリングをすることができたら、クラスのいい雰囲気をより早い段階で作り出すことができたのではないかと反省している。

C 4	セクションA・B・C		
I 担当講師名			
A： 藤原恵美（コースヘッド）・池田佳子			
B： 古川香苗（コースヘッド）・大嶋晶代			
C： 数野恵理（コースヘッド）・荒竹由紀			
II 学生のうちわけ			
学生数	A： 11名	A： 男性 6名・女性 5名	
	B： 12名	B： 男性 6名・女性 6名	
	C： 11名	C： 男性 4名・女性 7名	
国籍	A： アメリカ 10名（うち日系4・中国系3・韓国系1）・イギリス 1名		
	B： アメリカ 10名（うち韓国系1・中国系1）・韓国 1名・台湾 1名		
	C： アメリカ 5名・韓国 2名・中国 2名・台湾 1名・ポルトガル 1名		
III 教材（書名、扱った課の番号など）			
主 教 材	『テーマ別 中級から学ぶ日本語』（第1課、第3課～第10課）		
	『どんな時どう使う日本語表現文型200』		
	3セクション共通：第17課～第20課		
	セクションA： 第10、12、14、15、16課、まとめ4		
	セクションB： 第1、4、11、15、16課、まとめ4		
	セクションC： 第15、16課		
	『Basic Kanji Book Vol.2』 第23課～第32課		

副教材	『テーマ別 中級から学ぶ日本語 ワークブック』 詩 谷川俊太郎「まじめな顔つき」「黄金の魚」 金子みすず「わたしと小鳥とすずと」 宮澤賢治「雨ニモ負ケズ」 歌 SMAP「世界にひとつだけの花」平井堅「君はともだち」 夏川りみ「涙そうそう」Every Little Thing「Unspeakable」
視聴覚教材	音声テープ 「テーマ別 中級から学ぶ日本語」 ビデオ「続ヤンさんと日本の人々」

#### Ⅳ コースの目標

- ①初級コースで習った文法、表現、言葉と、新しく習った文法、表現、言葉を使って、正確に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりできるようになる。
- ②長い文章を読んだり、まとまった内容を話したりできるようになる。
- ③書き言葉と話し言葉の違いが区別でき、説明、意見、感想などが正しいスタイルで読み手に分かりやすく書けるようになる。
- ④ひとつの文ではなく、いくつかのつながった文でまとまった話を、相手や場面によって言葉のスタイルを使い分けて話せるようになる。
- ⑤テープやビデオから必要な情報が聞き取れるようになる。

#### Ⅴ 評価の基準

『中級から学ぶ日本語』 レッスンテスト (3回)	30%
『中級から学ぶ日本語』 言葉・文型クイズ (8回)	5%
漢字クイズ (6回)	10%
作文 (4回)	15%
作文練習ノート	5%
スピーチ (4回)	5%
プロジェクト	10%
期末試験『中級から学ぶ日本語』 漢字・作文・聴解・ 会話・速読	20%

#### Ⅵ 授業の構成 (1週間／1課のうちわけ)

##### ① 1週間のうちわけ

週により違いはあるが、1週間15コマの授業を以下の構成で行った。

『中級から学ぶ日本語』 テキスト (文型・読み・話す)	4コマ
『中級から学ぶ日本語』 聴解	2コマ
『中級から学ぶ日本語』 速読	2コマ
『文型200』	2コマ
会話	1コマ
ビデオ	1コマ

漢字	1 コマ
作文	1 コマ
詩／プロジェクト／ビデオ・歌／スキミング・スキヤニング	1 コマ
計	1 5 コマ
<p>②1 課のうちわけ</p> <p>メインテキスト『中級から学ぶ日本語』の前半から第1 課「たとえる」第3 課「はたらく」第4 課「あきれる」第5 課「たべる」第6 課「あそぶ」第7 課「いう」第8 課「かざる」第9 課「あらわす」第10 課「いきる」の全9 課をカバーした。1 課につき、聴解・速読を入れて4 コマを費やし、2 課毎にレッスンテストを行った。メインテキスト1 課分のうちわけは以下の通りである。</p> <p>1 コマ目「読む」「文型」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 前日に単語リストを配布する。</li> <li>2) 本文を精読した後、テキストの「答えましょう」に沿って本文の内容確認を行った。</li> <li>3) テキストの「使いましょう」と教師が作成した文型シートに沿って、文型導入を行った。</li> </ol> <p>2 コマ目「まとめる」「話す」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4) もういちど、本文について内容・語彙確認を行い、テキスト「まとめましょう」に沿って、読み物の内容をより深く理解する練習を行った。</li> <li>5) 本文で学習した語彙・表現を定着させること、また自分の意見を述べる力をつけることを目標に、課のトピックに関する意見を「話しましょう」にそって、話しあった。まず、グループで話し合った後、全体で話し合った。</li> </ol> <p>3 コマ目「聴解」</p> <p>『中級から学ぶ日本語』ワークブックの聴解教材を使用し、本文と関連あるトピックを聞く練習を行った。</p> <p>4 コマ目速読」</p> <p>『中級から学ぶ日本語』ワークブックの副教材を使用し、本文と関連あるトピックをもう一度速読した。</p>	
Ⅶ 授業の内容	
聞き 話し	『中級から学ぶ日本語』聴解／ビデオ「続ヤンさんと日本人々」／日本の歌 会話／ビジターセッション／『中級から学ぶ日本語』話しましょう／スピーチ ／『どんな時どう使う日本語表現文型200』
読み	プロジェクトの発表
書き	『中級から学ぶ日本語』本文の精読とワークブックの速読／詩／スキミング・ スキヤニング／Basic Kanji Book L23-32
	作文／プロジェクトレジュメとレポート ／Basic Kanji Book L23-32／詩／作文練習ファイル（『中級から学ぶ日本語』

	書きましょう／ジャーナル) *全ての授業で4技能を融合して行った
Ⅷ 校外学習	
日 時	8月5日(木)
行 き 先	江戸東京博物館(両国)
活 動 内 容	博物館の中を自由に見学 読解の授業に出てきた小判を探す 次の日に、一番面白かった事について一人ずつ報告
Ⅸ 総括(良かった点、反省点、今後の課題等)	
<p>基本的に昨年度のカリキュラムを踏襲したが、昨年度の反省に基づき、若干変更した。1) 主教材の単語文型テストは各課の最終限に実施。2) 詩・歌詞を読ませ、教科書と違う文学的文体を紹介。最終週に自由詩を作らせ、最終日前日、習った詩と学生の詩の朗読会及び習った歌の演奏会。3) ジャーナルと短文練習のノートを宿題に。4) スピーチ、2週目から。5) レッスンテストと期末試験で最終成績の50%とし、総合的に勉強させるよう配慮。6) 文型の五回目以降は、各セクションで指導が必要と思われる課を選択。試験もセクション別。これ以外のクイズ・試験は同一。一部学生からクイズの形式が統一されていないとの声が出た。作成担当者によって多少の違いがあっても、学習効果を損ねないと判断したが、形式の統一を徹底すべきだったかもしれない。</p> <p>セクションAは11人中8人がアジア系ということもあってか、おとなしく、活発さには欠けたが、ほとんど欠席、遅刻をしないまじめな学生が集まった。ジャーナルも課した以上の長さを書いてくる学生も多く、宿題も期日に提出し、真面目に学習に取り組んでいた。プロジェクトもこのレベルの学生としては、よくまとまった発表になった。五週間で発話力の大幅な伸びが認められる学生もあり、嬉しい結果であった。ただ、授業以外では、学生同士は英語を多く使っていたようで、C4のレベルでは仕方のないことであるかもしれないが、少々残念であった。 (文責 藤原)</p> <p>セクションBは、全体的に文法の弱い学生が多く、また語彙も中級レベルにしては極端に少ない学生が数名おり、最初は多くの学生が大変苦労していたようだ。しかし、みな真面目で前向きな学生たちで6週間を通して、ほとんど欠席・遅刻も出なかったという優等生ぶりであった。学生たちの特徴を考慮し、セクションBでは日本語の運用能力の向上を図るため、未習事項はもとより、既習でも定着していない初級レベルの学習事項を整理する時間を作ったり、それをクラス活動として練習する時間を取った。結果として6週間で四技能において、今後の日本語学習に必要な基礎的な力をつけられた学生が多かったのではないと思う。しかし、課題や試験の多さに圧倒され、落ち着いて学習事項を定着させられなかった学生も数名いたことは残念であった。クラスの雰囲気は非常によく、学生にとっても、また担当教師にとっても心地</p>	

いい雰囲気だった。また、歌が好きな学生がとても多く、日本語の歌を紹介すると最後には皆の大合唱で終わったのは、担当教師にとってもうれしい驚きであった。（文責 古川）

セクションCは、本国で中・上級のコースを取ってきた学生も多かったためか、作文が非常によく書けていた。しかし、初級文法をあまり覚えていなかったり、誤りが化石化していたりする学生が多かったので、対策として、コース半ばでC2、3レベルの文法をすべてクイズ形式で確認した。これにより、学生に自分自身の弱点を認識させることができ、効果的だったが、実施時期が遅くなってしまったことが悔やまれる。コース後半では、弱い文法項目を重点的に復習し、初級文法の徹底を図った。（文責 数野）

C 5	
I 担当講師名	
村松千恵（コースヘッド）・高木ひろ子	
II 学生のうちわけ	
学生数	12名 男性 8名・女性 4名
国籍	アメリカ 9名（含アジア系）・台湾 2名（アメリカの大学に在学中）・ドイツ 1名（アメリカの大学に在学中）
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主 教 材	『テーマ別 中級から学ぶ日本語』 第15、17課、18課、21課、22課 『どんな時どう使う日本語表現文型500（中・上級）』 1、6、18、19 『Basic Kanji Book Vol.2』第43課～第45課 『Intermediate Kanji Book Vol.1』第1課～第4課
副 教 材	『速読の日本語』 『なめらか日本語会話』 『聴解ストラテジー（下）』 『毎日の聞き取り』
視聴覚教材	ビデオ 「さくら 総集編」（上・下） その他、個人所有の録画ビデオ：「外国人がやってくる」「乱れた敬語がまかる通り」「ステレオタイプ」「少女が悪魔になる時」「カタカナ語の氾濫」
IV コースの目標	
(1) 話す、聞く、書く、読む、の4つの日本語の技能が適切に、総合的に使えるようになること	
1. Productive Skills	

<p>           叙述や描写ができる／説明や報告ができる／要約ができる／意見交換ができる／単文の羅列ではなく、ディスコースのレベルで話しができる／相手・場面によって丁寧さの度合いを変えたり、表現のスタイルを使いわけることができる／書き言葉と話し言葉の違いがわかり、正しいスタイルで読み手にわかりやすく文章を書くことができる／正しい文型、表現、語彙、漢字を覚え、豊かな表現力を身につける         </p>	
<p>2. Receptive Skills</p> <p>速く、正しく、必要な情報、または、大意を読み取ることができる</p> <p>自然な速さで話された会話の大意がわかる</p> <p>ニュース、ビデオなどから、必要な情報を聞き取ることができる</p>	
<p>(2) 日本文化、日本社会、日本人の物の考え方について理解を深める</p> <p>日本語の使い方の背景にある、日本人や日本社会の実像を、自分の目と耳を使って考える。いろいろな資料を使い、日本人へのインタビューを通して調べたことを報告し、自分の意見が発表できる。</p>	
<p>(3) 自立学習</p>	
<p>(4) 毎日の生活に日本語を応用する</p>	
<p>V 評価の基準</p>	
<p>授業参加・準備・授業態度</p> <p>ショートスピーチ</p> <p>宿題</p> <p>クイズ</p> <p>チャプターテスト</p> <p>期末試験</p> <p>ファイナルプロジェクト</p>	<p>10%</p> <p>5%</p> <p>10%</p> <p>10%</p> <p>20%</p> <p>20%</p> <p>15%</p>
<p>VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）</p>	
<p>教科書（読解） 4コマ／課 4コマ／週</p> <p>1コマ：トピックの紹介／新しい言葉・漢字／新しい文型</p> <p>2コマ：新しい言葉（復習）／新しい文型（復習／導入）</p> <p>3コマ：単語クイズ／内容理解</p> <p>4コマ：漢字クイズ／内容要約／応用・発展</p>	
<p>文型 2～3コマ／課 4～6コマ／週</p> <p>1コマ：説明と練習／宿題</p> <p>2コマ：宿題答え合わせ／説明と練習</p>	
<p>漢字 2～3コマ／課 4～6コマ／週</p> <p>1コマ：テーマに基づいて漢字の導入／読みの練習／基本練習／宿題</p> <p>2コマ：復習／宿題の答え合わせ／応用練習</p>	

Ⅶ 授業の内容	
聞き	聞き取り用の教材を使ったりしたもしたが、主に、生教材（ビデオ、「さくら」）などを使い、練習した。
話し	自然な発音で自然な日本語を話せるようになる練習をした。
読み	ビジターセッション、「さくら」のお話りレーなどを取り入れた
書き	主教材の他に、新聞記事、雑誌の記事などを使って練習した。 ディスカッションで扱ったテーマをもとに、2度作文を書いた。1度につき初稿と最終稿を書いて提出させた。
Ⅷ 校外学習	
日 時	7月30日（金）
行 き 先	東関部屋見学、及び、江戸東京博物館見学
活 動 内 容	すもうの朝稽古の見学。すもう部屋で5人以上はお断りと言われ、くじで4人を選んだ。その他の学生とは、東京江戸博物館で待ち合わせ、東京の歴史を学んだ。その後、みんなで昼食を共にした。
Ⅸ 総括（良かった点、反省点、今後の課題等）	
<p>クラス全体の雰囲気が非常に和やかで、みんながお互いに協力的で、授業中も熱心に勉強し、宿題が多いと文句を言いながらも、「やってこない」という学生がいなかった。コースが始まったばかりの頃に比べて、「日本語で話す」ということに抵抗がなくなったのか自信がついたのか、コースが終わるころには、こんなに日本語が話せるようになったのかとびっくりした。漢字も週に4コマ取り入れたためか、何人かの学生から「自然に漢字を書いていた」とか「新聞の漢字が読めるようになって自分でもびっくりした」というコメントを聞いた。コース最後のファイナルプロジェクトの内容も、期待以上の出来だった。ただ、私がコースヘッドはじめてということもあり、スケジュールに変更があったり、クイズが重なってしまったり、勉強以外のことでフラストレーションを学生に与えてしまったことを反省している。また、同じC5の学生の中でもレベル差がもちろんあり、もう少しそういうレベル差を考慮に入れて指導できる余裕があったら、どの学生にとっても、もっと実りの多い学習経験になったのではないかと反省している。</p>	

C 6	
Ⅰ 担当講師名	
増山和恵（コースヘッド）・野中陽子	
Ⅱ 学生のうちわけ	
学生数	10名
男性	2名・女性 8名
国籍	アメリカ 4名（うち中国系2）・カナダ 1名・台湾 5名
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主 教 材	『Intermediate Kanji Book Vol. 1』第1課～第5課

	『どんな時どう使う日本語表現文型500』第8課まで
副教材	『中・上級日本語教科書日本への招待（テキスト／ワークブック）』テーマ1、4 『中級から上級への日本語』第1課～第2課 『日本語作文I』Ⅰ：第4課、Ⅱ：第31課 『テーマ別中級から学ぶ日本語（テキスト／ワークブック）』第5、7課 『速読用の文化エピソード』 『A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar』
視聴覚教材	『毎日の聞き取りプラス40上・下』 ビデオ「さくら 総集編」上・下

#### IV コースの目標

四技能（話す力、聞かす力、読す力、書す力）を伸ばしながら、日本への理解を深める。

聞く力：(1) 身近なトピックに関するニュースを聞いて概要がつかめる。

(2) クラスメートの発表を聞いて、理解出来る。

話す力：(1) 段落単位で、出来事の 叙述(narrating) や描写(describing) 出来る。

(2) 段落単位で、出来事の説明や報告出来る。

(3) 話の要約出来る。

(4) 話し言葉と書き言葉の使い分け出来る。

(5) フォーマル、インフォーマルの使い分けがある程度出来る。

(6) インタビュー出来る。

(7) ディスカッション出来る。

(8) 自分が書いた論文をわかりやすく発表出来る。

読む力：(1) 一定のスピードで身近な話題を扱った複段落の読み物の概要がつかめる。

(2) 図や表の入った読み物の内容がわかる。

(3) 新聞やインターネットの情報を読んで、必要な情報を汲み取ることができる。

書く力：(1) 一週間のうち、最低5回はその日に起こったことを記録し（日記）、その中で、  
習った漢字、言葉、文型表現が使えるようになる。

(2) 各週のテーマについて、自分の意見を表現出来る。

(3) 自分の調べたい話題で、論文を書ける。

#### V 評価の基準

クイズ／宿題	20%
テーマ別テスト（5回）：読解・口頭発表・作文	50%
期末テスト：スピーチ、ポートフォリオ作成、エッセイ	10%
論文プロジェクト（論文／発表）	15%

口頭レポート（スピーチ／お話しレー／インタビュー）		5 %
＊ ジャーナル（25回以上）		1～5 %（エクストラ）
＊ 聞き取り練習（15回以上）		1～5 %（エクストラ）
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）		
<p>1 限目は毎日漢字と文型練習を約35分ずつ行なった。毎日5分程度の漢字クイズか文型クイズのどちらかを行い、学生は予習、復習をして来ることを義務づけた。2 限目は毎日学生（2人）の1分間スピーチから始めた。残りの時間と3 限目は各週のテーマに関する様々な教材を読み、話し合いを行った。テーマは1週目に学生にアンケートをとり、興味のあるトピックを選ぶようにした（私／私の住んでいるところ、日本の習慣、女性の生き方、食べ物、仕事への意識／生き方）。5日間（水曜日に始め火曜日に終わるパターン）で1テーマというペースで、そのテーマに合わせて週ごとのカリキュラムを作っていた。また授業には必ず日本人とのビジターセッション（1回：70分）をもうけ、学生が各テーマについてインタビューをしたり、話し合ったりする機会をもうけた。5日目（最終日）は、テーマの読解／文型テスト（45分）、各自が書いてきた作文を口頭発表（ひとり5分程度）した。また、その日の3時まで、テーマについての作文（原稿用紙2～4枚）を提出させた。残りの時間は、次のテーマに関するオリエンテーション（スケジュール／読み物教材配布）と論文プロジェクトのオリエンテーション（テーマの選択、アウトラインの書き方、論文の書き方、発表の仕方など）をした。5日間に1～2回「さくら総集編」の聞き取りをしたり、お話しレーをしたりした。午後は各自でラボでテープを聞く機会をもうけた。また毎日日記をつけることも勧めた。</p>		
VII 授業の内容		
聞き	講義、談話、発表、ニュースを聞く（毎日の聞き取りプラス40上・下、ビデオ「さくら総集編」）	
話し	日本人との会話（ビジターセッション）、スピーチ（短長）、質疑応答、ディスカッション、お話しレー、作文／プロジェクトの発表	
読み	精読：『日本への招待』、『中級から上級への日本語』 速読：『中級から学ぶ日本語』、速読用の文化エピソード 漢字の読み、論文に関する資料（インターネット、専門書など）	
書き	文型に基づく文章づくり、トピック別作文（5回）期末作文、ポートフォリオ、論文、日記	
VIII 校外学習		
日 時	7月30日（金）	
行 き 先	築地市場見学	
活 動 内 容	東京都の会議室で卸売り市場に関するビデオを見た後、市場を見学した。食べ物に関するタスクシートを学生に与え、見学中に自由にインタビューさせた。昼食を築地で食べた際、たまたまC6の学生でお寿司屋さんが満席になってしまったため、食べ物について板前さん達といろいろ話すことができた。築地で	

	解散したが、希望した学生と、築地本願寺、深川資料館、浅草を午後一緒に見学した。スピーチ、日記で感想を発表。
IX 総括（良かった点、反省点、今後の課題等）	
<p>昨年度のカリキュラムを参考にしたが、基本的には学生との話し合いを通し、週ごとにテーマを選びながらカリキュラムを作って行った。其の為、学生は読み物の難度が高くても興味をもちながら、授業に望んだように思われる。教師側も1つのテーマを一人の先生が担当するという形を取ったので準備する時間が取れ、臨機応変な授業運営ができたので教えやすかった。ただ、授業時間に関し、学生からは集中しやすいので50分授業を望む声があった。</p>	
<p>学生の「ICUサマーコースを振り返って」というエッセイのコメントも考慮しながら総括してみたい。まず、週トピックに関して作文を書かせ5分程度のスピーチを必ず週に1度をさせたことが、はじめは大変だったようだが、最終的には学生の日本語能力を伸ばしたようであった。また、インタビューや読み物を通し、学生は日本語を学ぶと同時に日本社会事情や人生ということに対し、真剣に「考える」機会を得たようだ。教室内でのスピーチやディスカッションでは間違えてもいいから自分の意見をいうように指導したのがよかったのか、学生の「はずかしい」という気持ちが少しずつ減り、授業では活発な意見交換できるようになった。学生の間違がった発話はメモをしておき、個別指導の時間に行った。作文も書き直しをさせたので、自分の意見を自分の言葉で表現できるようになった。</p>	
<p>主教材の『日本語表現文型500』と『Intermediate Kanji Book Vol. 1』に関しては賛否両論があった。文法が弱い学生にとって同じようなパターンが十分な説明なく羅列されている文型は、わかりにくいし、覚えにくかったようだ。教える側にしても、日本語でニュアンスの違いを説明したり、副教材を作ったり、コンテクストを考えたりするのは大変であった。結局、『A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar』の説明を活用することが多かった。漢字も同じで、よくわかる学生には簡単で、漢字の弱い学生にとっては授業も勉強もかなりの負担であったようだ。ただ、非常に上手に構文を作ってきた学生や漢字を知っている学生もあり、彼らの存在はいい意味でクラスメートを「刺激」したと思う。</p>	
<p>教師側の反省としては「読み」に関して新聞記事を活用したり、「聞く」ではテレビのニュースを毎日5分聞かせたりという活動をもっとすべきであったと思う。また、論文指導は2週目から行ったが、5週目になってからトピックを変える学生がいたので、もっと指導を徹底すべきだったと思った。また、学生の多くが教室以外での活動（ホームステイ、週末の小旅行、電車の乗り方、買い物情報）などの良さを述べていたので、1分間スピーチのみならず、もっと彼らの週末活動と授業が関連できたらよかったのではないかと思う（例えば、「ホームステイの心得」についての小プロジェクトなど）。</p>	
<p>C6の学生は真面目で、素直で、明るかった。いつも遅刻した学生が3人いたが、授業にはみんな協力的で、日本語を勉強したいという学生が集まっていた。クラスメート同士仲がよかったため、大変まとまりのあるクラスだった。</p>	

C 7		
I 担当講師名		
佐藤由紀子（コースヘッド）・本橋美樹		
II 学生のうちわけ		
学生数	9 名	男性 0 名・女性 9 名
国籍	アメリカ 5 名・イギリス／スイス 1 名・台湾 1 名・ロシア 1 名・ 日本 1 名（フランス人とのハーフ）	
III 教材（書名、扱った課の番号など）		
主 教 材	読解教材 新聞記事、新書版書籍、その他よりの生教材各種 漢字教材 『Kanji in Context Vol. 1』第 1 回～第 3 1 回 文法教材 『日本語表現文法 5 0 0』1 ～ 1 1	
副 教 材	主教材との区別は特になし	
視聴覚教材	ビデオ「クローズアップ現代」ほかテレビ番組各種	
IV コースの目標		
各種読み物、ビデオ、講演などから現在日本で注目されているいくつかの話題について情報を得、その話題について討論や口頭発表をする、レポートを書くなどの作業を通して、語彙、表現を習得する。また、日本人会話ボランティアとの討論により、若い世代や大人の普通の日本語に触れるとともに、日本人自身はこれらの事柄についてどのように考えているかを知る。また、このような活動を通じ、現代日本人の価値観や思考、行動様式への知識を増し、自らの価値観、思考を検証する。さらに、『Kanji in Context』の教科書を使い、既習・未習の漢字を使った漢字語彙や関連語彙を学び、漢字の知識を体系的なものとする。さらに、『日本語表現文型 5 0 0』を用いて、助詞相当句や文末表現の学習をする。		
V 評価の基準		
中間試験（筆記と口頭）		1 5 %
期末試験（筆記と口頭）		1 5 %
論文制作		1 0 %
論文口頭発表		1 0 %
テーマ作文（4 回）		1 0 %
テーマ口頭発表（3 回）		1 0 %
宿題（読解予習シート、ビデオワークシートなど）		1 0 %
漢字小テスト、表現文法小テスト		1 0 %
クラス討論への参加		1 0 %

VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
週によって多少異なるが；	
読解・討論	7コマ
ビデオ	2コマ
漢字	2コマ
表現文型	2コマ
論文の書き方指導	1コマ
会話ボランティアとの討論	1コマ
VII 授業の内容	
聞き	授業中、教師や会話ボランティアの話を聞く。ビデオの内容を聞き取る。
話し	NPOスタッフによる講演を聞く。
読み	授業で扱った話題について、学生同士あるいは会話ボランティアと話し合う。また、毎週のテーマ、および、各自の論文の内容について、口頭発表をする。
書き	各種読み教材を読み、情報を得る。
	毎週のテーマに沿ってA 4 1 ページ程度のレポートを書く。また、コースの最終目標として各自の選んだテーマについて5、6 ページの論文を書く。
VIII 校外学習 実施せず（代わりに、NPOスタッフによる講演を聞いた。）	
日 時	7月29日（木）3時限目
活動内容	NPOピースウィンズ・ジャパンのスタッフによるこの団体の海外援助活動についての講演。この週のテーマ「日本の海外協力」にそって、緒方貞子氏の講演記録を読んだり、アフガニスタンで医療活動をしている中村哲氏の活動記録のビデオを見たりしたが、その一環としての講演。
IX 総括（良かった点、反省点、今後の課題等）	
<p>「変わり行く日本の若者の価値観」「日本の中の外国人」「日本の国際協力」「女性の生き方」「今日本で流行っていること」「その他」のテーマにそって、読解テキスト、ビデオ、討論、会話ボランティアとの話し合いなどを相互に関連するように組み立て、これらの話題についての語彙、表現を体系的に学習するとともに、学生自身がこのような話題について自ら考え、表現するという訓練ができたことはよかったと思う。テーマ自体も多くの学生にとっては知的刺激を与えるものであり、概ね好評だったと考える。</p> <p>漢字学習に関しては、教科書の初めから毎回3課分ぐらい進めたが、6週間で扱えたのは31課までであり、これは上級学習者にとっては既習の漢字の範囲だった。既習漢字を使った語彙の拡張という意味では有意義だったが、学生にとっては新しい漢字を勉強したという意識はもてない結果になってしまった。むしろ教科書の途中から始めた方がよかったと反省する。</p> <p>また、語彙の拡張という位置づけであれば小テストは漢字の読みのみに限定せず、語としての意味や使い方を学習したかどうかを問うようなテストにすべきだった。「表現文型」について</p>	

は、意味分類に基づいて表現文型が提出されている教科書である『日本語表現文型500』をすべて1課から網羅する形で進めると、3分の1程度しか終わることができず、中途半端な感が否めない。あらかじめ教師の方でいろいろな意味分野にわたる中級レベル以上（上級コースとは言え、この面での学生の知識は中級レベルの学習も必要としている）の表現文型を取り上げて、自主教材を準備した方がよいように思えた。

今回最大の反省点は、多摩大学の学生さんたちとの「交流会」だった。事前に十分な理解がないままに「既定のこと」として、C7とC8の授業の中にこの交流会を組み込むことになったが、結果的には「何のための交流会だったのか」「先方は何を望んでいらっしゃったのか」疑問が残るままに終わってしまった。単に日本人学生と知り合いおしゃべりをするというのなら、サマーコースの上級レベルの学生たちにはあまりメリットがないように感じる。学生たちは「面白かった」「いろいろ話せてよかった」とプラスに評価してはいたが、教師としてはそれだけでよいのかと思う。来年度もこのような申し入れがあった場合は、熟考を要するものである。

細かいことだが、今回初めて土曜日に期末試験をするという日程になったが、土曜日は教室にエアコンが入らないとのこと。コース末で疲れている学生が猛暑の中で期末試験に臨む姿は気の毒だった。また、武蔵境駅からのバスの便が土曜ダイヤであることを事前に学生たちに伝えていなかったため、遅刻しそうになり慌てた学生もいたようだ。担当教師が当該情報を学生に伝えなかったことを反省もするが、同時にこのような情報はSCJ全体の重要情報として学生に伝えていただけていたらと思う。

C 8	
I 担当講師名	
江崎裕子（コースヘッド）・佐々木智子	
II 学生のうちわけ	
学生数 6名	男性 4名・女性 2名
国籍 日本 3名・アメリカ 1名・シンガポール 1名・フランス 1名	
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主 教 材	『Kanji in Context Vol.1』第1回～第94回（全部）
副 教 材	新聞 「天声人語」「<ゆとり教育>失敗を超えて」「言葉の壁」「芥川賞」等 教科書 『日本への招待』より「増える視先平気症候群」「登校拒否」 『研究発表の方法』 本 『バカの壁』『ケータイを持ったサル』『私の仕事』『日本人とアイデンティティ』 『閉ざされた言語・日本語の世界』『大江健三郎・往復書簡』『負けてたまる

	か』『脳を侵す環境ホルモン』 (文学・分担読解) 『人間失格』『美神』『火垂るの墓』『鼻』等
視聴覚教材	ビデオ NHK クローズアップ現代「乱れた敬語がまかり通る」「環境ホルモン汚染」 「少年犯罪・遺族たちは訴える」「危機に立つ広島」 NHK・もの知り一夜づけ「携帯電話」民放・知ってるつもり「夏目漱石」 ラジオ TBS月尾先生の話「ユピキタス」「オン・デマンド」「米と麦」

#### IV コースの目標

日本語と日本文化に対する認識を深め、日本語の完成を目指す。新聞記事、論文、小説を読んだり、ラジオ・テレビの番組を視聴したりすることにより、現代の日本社会が抱える様々な問題の一端に触れ、日本人の生活と考えるを知る。また、大学生・社会人として、日常生活や専門分野において、適切な日本語で表現活動が出来るようにする。

#### V 評価の基準

試験2回	30%
小論文と発表	20%
漢字クイズ	10%
聴解	10%
口頭表現	10%
文章表現	10%
提出物	10%

#### VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）

漢字	4コマ（1日5回分）
読解	4～5コマ
聴解	2コマ（ビデオ1・ラジオ1）
口頭表現	2コマ
文章表現	3コマ
各技能はお互いに密接に結びつくよう配慮したので、上記の分類は形式的なもので実際には総合的な授業になっている。	
各週のテーマ	
第1週、第2週「若者」	
第3週「言語」	
第4週「文学」	
第5週「時事問題と自然科学」	
第6週「平和」	

Ⅶ 授業の内容	
聞き	ラジオ、テレビのインタビュー、ドキュメンタリーなどを扱った。正確に、言葉、表現、内容を把握し、意見交換。
話し	意見の言い方、敬語の使い方を練習した上で、多摩大学生との交流会や社会人ボランティアの方との会話練習。伺った話の内容は論文の参考とした。また読解や聴解の際に、必ずディスカッションをした。
読み	新聞記事、論文、小説などの一部を読んだ。一語一語の読み・意味を正確に学び、文章の要点や全体の構成、筆者の主張を把握し、内容に対する自分の意見や感想を述べたり、文章に書いてまとめたりした。
書き	手紙、意見、要約の書き方。また、論文作成に向けて論文で 用いられる文章表現、構成、技術を学び、最終的に約10ページの小論文を作成した。
漢字	(1) 常用漢字の中から1200字を用いた漢字語彙の読み書き、意味、使い方 (2) 読解、聴解で出てきた漢字語彙の読みと意味 (3) 四字熟語を学習
Ⅷ 校外学習	
日 時	8月3日(火)
行 き 先	江戸東京博物館
活 動 内 容	ガイドのボランティアの方に、5,6階の常設展示室を案内していただいた。全て日本語で三時間弱、江戸から現在までの東京の歴史の話を伺った。実物資料や模型を見ながら、大変有意義な日本史の授業となった。
Ⅸ 総括(良かった点、反省点、今後の課題等)	
<p>四技能を総合的に組み合わせながら、毎週テーマを設けて、授業が進むよう工夫した。毎日学習する漢字、語彙数は非常に多く、教材の難易度も高かったが、学生は6人とも優秀で、努力して猛勉強を続け、協力して授業に取り組んだ。また外国人が3人いたため、ディスカッションの内容は多様で、問題意識の深いものとなり、学生の日本語能力向上のみならず、日本や日本人への考え方への認識や、自らの思考も深まり、意見の表明の仕方も上達した。</p> <p>一つ残念なのは、今夏の猛暑と厳しい授業内容のために、2人が第5週と第6週に入れ替わりで病気になってしまったことだ。彼らの勉学への意欲が強かっただけに、本当に気の毒であった。午後の個人の授業で、一層きめ細かい個々の学生への体調管理を含む対応をするべきであった。</p>	